

お蔭まいり — 耕作放棄でレジスタンス —

表門をあけておくと、一度通用門からやってきた集金人がまた迷い込んで、キツネにつままれたような顔をする。——豊中市刀根山元町九五、浅井経夫さん(五) (豊中信用金庫常務理事)の家はそれほど大きい。摂州豊嶋郡南刀根山村の庄屋・浅井甚兵衛の末孫で、家はほとんど原型をとどめている。それだけに伝わる話もこせつかない。

「用意ができたぞ、裏へまわせ」——祖父の甚兵衛さん(昭和二年七十八歳で死亡)が大声でどなりながら、玄関わきの大ダイコをたたいていたのを、経夫さんはおぼえている。邸内に泥棒が忍び込

んだことを村じゅうにふれまわりながら「お前はもう包囲されているぞ」という威かく。タイコひとつで村人五十戸が全部はせ参じた。四代前の甚兵衛(経夫さんの祖父まで襲名)は藩主のもとへ村の年貢をねぎりに行き、いれられないと去りぎわに「一発」。「無礼者」の声に「出ものはれものところさらわず」とやり返したという。



地車(だし)を引き出した村もあった(伊丹市北村、臂岡天満宮所蔵)

同家の家訓は「まずめしをたけ」という風変わりなもの。『事がおれば食を確保せよ』ということだ。その根拠をさぐると「大塩平八郎」で説明した天保大キキン(一八三三、三六)のとき、同家は米の流通をよくするため周辺六郡の「五穀仲次取締方」をつとめていたことや「豊作のとき買い込んだ米を、凶作のとき相場より安く売る」納屋米(なやまい)の販売をやっていた精神が、いまに続いているようだ。もっとも納屋米で同家は安政二年(一八五五)に六・二ヘクタールの大地主になるのだが。昭和四十年八月、刀根山元町で火災があったとき、経夫さんは「早うめしをたけ」と思わずさげんで、自分でおかしくなった。その人望ある浅井家

に、天保元年（一八三〇）お蔭（かげ）まいり、お蔭おどりの集団がなんと九回もおどり込んでゐる。

お蔭まいりは民衆が集団を組み、大挙して伊勢参りをすることだ。はじめは慶安三年（一六五〇）で、それ以後「大体六十年ごとによってくるお蔭年に参拜すると、特別に利益（りやく）がある」とだれともなくいいふられ、宝永二年（一七〇五）明和八年（一七七二）天保元年に全国的に流行した。とくに天保のものが大阪を中心に近畿地方ですごかった。参加者は気違いのように、領主や家人にもことわらず、食べものをついでもらうひしゃく一本をもって飛び出した。彼らは道中「おかげでさ、するりとな、抜けたとさ」とうたいおどり歩き、一名「抜けまいり」ともいわれた。「おかげの抜作」という当時の騒ぎを記録したものに、こんな話がのっている。

「ある家の夫婦、たがいに抜けまいりを争い、大げんかをなしけるが、隣家のあいさつにて仲直りをなすとて、女房に徳利を持たせて酒を買いにやりけり。そのすきに旅装いをなし、抜け出でんと思けるに、あにはからんや、その徳利を店の端に残し置きて、婢（かかあ）から先へ抜けたるは、誠に大笑い。とっくりと親父をだまして飛んで出た、婢賢し親父とろくさし」。

なにが彼らをそうさせたのか。お蔭おどりののはじまった慶安年間には、有名な「慶安ふれ書」が出ている。「男は作をかせぎ、女房は芋（お）はたをかせぎ、夕なべをし、夫婦ともにかせぎ申すべし。しかればみめかたちよき女房なりとも、夫の事をおろそかに存じ、大茶をのみ物まいり遊山すきする女房を離別すべし」。とにかく働いたうえにも働け、というおふれ。それでいて「百姓どもは死なぬよう生きぬようと合点いたし（心がけて）収納申しつけるよう」（家康のことばといわれる）の方針だから、たまったものではない。民衆の熱狂の原因は、そんな悲惨さをしばらくでも忘れたいというはかないレジスタンスだった。天保元年のその様子を庄屋・甚兵衛は次のように書きとどめている。

「阿波（徳島県）から動きはじめたお蔭参宮は、灘・兵庫・西宮・伊丹から大阪に出た。堂島では大きな蔵三か所が宿となり、一夜に千八百人も泊まった。それから大阪市内町ごとに大変な参けいで四月十一日から十七日まで毎日十七万人といわれた。南河内から大和と踊り狂い、十二月の掛け取りもできなかつた。二年になるとふたたび河内に帰り、北河内―山崎―島上、島下（いまの高槻）から西国街道を西へ拡大、領主権力でも押えられなかつた。首頭は「かけ払いはよいさよいさ」の支払延期で、いたるところで豪家を訪れ、寄付を要求した」。

天保のときには民衆は貸借関係の延期や耕作放棄をなかば公然と行ない、せつな的な集団行動に日ごろのうさを晴らす。甚兵衛家の思いやりも、この時代には通じなかつた。広い屋敷は群衆にうめつくされたことだろう。合法と非合法の間をゆくこの騒ぎが、もう一步押し進められるとき、それはすでに紹介した天保の打ちこわし、大塩の乱をへて幕末の「世直し一揆」へと進むが、それまでには少し間がある。

くちやにあがった。そこへ十万人にもおよぶ随行軍の接待。彼らの士気は極度に低く、軍紀はゆるんでいた。国をほろぼすのはこいつらと違うか——「公儀こそ万民の敵」という感情は、町人では大阪人がいちばん早くもった。

## 怒る大阪三郷 — 米価高騰で民衆ほう起 —

將軍家茂の大阪入城が「その混雑不人氣いわん方なし」の状態では、幕府の内部にさえ「これで戦争をはじめると、どんなことになるのか」という心配が出るのは当然だ。長州再征に反対して自宅に引きこもっていた幕臣・勝海舟は、徳川一門の重鎮で越前藩主の松平慶永（よしなが）に「人心の離散は日にあい見え、これはもつとも恐るべく……」という手紙を寄せている。やはり幕臣で家茂の政治顧問をしていた大久保一翁（いちおう）も「そのうち上下疲弊（ひへい）あい極まり、また他症発すべく、これなくとも総体に発病にては難治と過慮苦心つかまり候」と病人にたとえて幕府の容体を書き、長州再征強行は他症（人民ほう起）を招くと予測した。その心配はみごとに的中する。

家茂が大阪入りした慶応元年（一八六五）一石（百四十キログラム）当たり銀四百十二匁（約十一万六千八百円）まであがった米は、翌年正月の初相場で四百七十三匁、再征直前の同四月には七百匁（十九万九千八百円）、開戦後の六月末にはなんと一貫目（二十八万二千円）の気ちがい相場になった。物価高の現在でも百四十キログラム当たり一万七千円だから「米一升金一升」そのもの。幕府や出陣を命じられた大名が兵ろう米を買いしめたり、領外積み出しを差しとめた。そのうえ商人が米暴騰を見越して買い占め、売り惜しみしたからだ。

大阪をはじめ、近郊の農村にはすでに多くの賃金労働者や、小商人、小作貧農が生まれている。彼らは米の値があがると、たちまち生活が狂ってしまう。おまけに大阪、西宮、兵庫の富豪に課したご用金は、摂・河・泉・播州の天領からの年貢をカタに七百万両（千百九十億円）。これもいづれ一般民衆にハネ返っていくから、関西一円の幕府に対する感情はもはやうらみ、怒りなどというなまやさしいものではない。民衆が怒りを越えたとき、実力行使へ進むのは歴史の教えるところだ。

慶応二年五月一日、西宮で長屋のおかみさん連中が米の安売りを強要する運動をはじめ、三日には西宮全体の米屋、酒造家へ押し寄せる大騒動となり、五日まで続いた。八日になると兵庫、伊丹、池田に飛び火、とくに湊川では二千余人が集まって米屋、酒屋、質屋など四、五十軒を打ちこわした。ほう起した大衆は幕府軍の威かく射撃に平気などころか、逆に反撃に出る始末。九日に諸藩の援兵が出て、やっと静まった。西宮を中心とする酒造地帯が、打ちこわしの発生地となったのは、数多くの賃金労働者がいたからだ。幕府は大阪へも騒動の波がおし寄せてくるのを予想した。五月十日「心得違いのないように……」との徒党禁止令を出したが、かえって油をそそぐ結果となる。征長大本営・大阪城は、やがて民衆のあげるトキの声のなかに、孤島のように浮かぶ事態を迎えるのである。

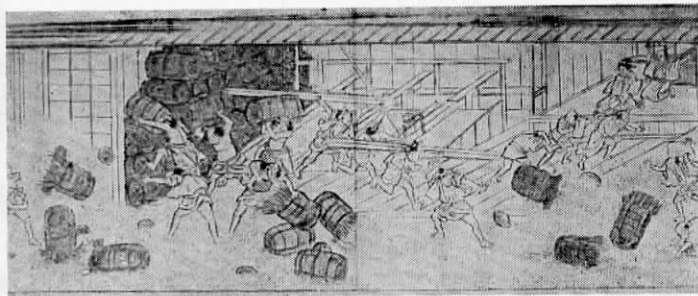
大阪三郷の南はずれ、いまの浪速区、西成区一帯は「畑場八か村」といわれ、江戸時代の初めから開けた野菜の栽培地帯だった。西成区玉出あたりは摂州西成郡勝間（こつま）村と呼ばれ、ここで作

## 世直し — 新しい世へ民衆の代弁 —

三郷の南端は東部は上本町四丁目まで。西部はいまの難波新地あたりまで。この線から上本町通りに沿って寺町が四天王寺まで、日本橋筋に沿って庶民街の長町（ながまち）がいまの恵美須町付近まで、それぞれ突き出していた。東端は環状線、西端は西区江之子島あたりだから、こじんまりしたものだ。

その町なみをぬって東西に七・七メートル（四・三間）、南北に五・九メートル（三・三間）の道路が走っていた。東西の道幅が広いのは、まず大阪城を起点として、また西に海をひかえて風向きに至るまで生活が東西にひらけていたからだ。船場では大阪城に向かう東西線を「通り」といい、老舗（しにせ）が軒をならべ、南北線は「筋」といって、通りをはみ出した同業者が小さな軒をならべていた。

そんなお城中心の大阪三郷が、城をにらんで立ちあがったのである。



打ちこわされる米屋（東京国立博物館蔵）

ところで、幕末の大阪市中はどんな姿だったのだろうか。地図をみると市街地をあらわした方形は、黒丸・黒三角・白三角の三つのマークで分けられている。つまり市中は三郷といつて三つに分かれていた。淀川（大川）から北が天満組、淀川以南を南北に分け、いまの本町通りから北が北組、南は南組である。豊臣氏の大坂が城とともに荒廢したあと、初代領主になった家康の外孫・松平忠明が市街地を整理し、河村瑞賢が川を整備してできた町だ。安永九年（一七八〇）に三郷あわせ六百二十町となったが、それ以後、明治維新までは少しも町数がふえておらず、ここにも中期以後の徳川施政の停滞ぶりがうかがわれる。

天満組の北端は梅田新道を東西に走る電車道の一つ南側。いまでも梅田東映会館のすぐ南の道が低くなっているのは、天満組の曾根崎新地と三郷にはいついもない曾根崎村の境界線の名ごり。この道以北は俗に下原（したばら）といわれた沼地で、梅田の地名は埋め立ててつくった「埋田」（うめだ）から変わったといわれる。しかし二百四十二年前になくなった作家・近松門左衛門の作品に「梅田橋」とあるから、幕末には梅田でとおっていたのだろう。



一つは住吉村を経て遠里小野村でやっととまった動き。一つは堺から大阪湾ぞいに紀州近辺までのびた。それとは別に河内国分村（柏原市国分）では、大阪三郷以上の騒ぎとなった。綿とナタネの加工がさかんなこの村も、米の高値で困るのは畑場八か村と同じだ。四日に富田林で起きた米の帳面買い、つまり前借に刺激されて二十日米屋や庄屋を襲った。大阪町奉行所から捕り手が出たが「百姓数百人が空砲を鳴らし、竹ヤリを持って役人を追っかける」（塩野家文書）ありさまで、やむなく大阪城代は和泉の岸和田藩、河内の狭山、丹南両藩、大和の高取、南郡山両藩の五大名に出兵を命じた。数百人の百姓一揆（き）に五大名がふり回されるのが、このころの幕府の「実力」であった。

上方にはじまった打ちこわしは、この年五月末から六月にかけて江戸へ飛び火、さらに武蔵（東京都、埼玉県）上野（こうずけ・群馬県）へ広がる「武州一揆」、信夫（しのぶ）、伊達地方（福島県）を中心とする「世直し一揆」、豊後（大分県）の「百姓一揆」へと発展する。この打ちこわし、一揆が「世直し」「世ならし」とよばれたのは、民衆が幕藩体制以外の世の中を、はっきり考え出したからなのである……。

エエじゃないか —天から？おフダふる—

「大阪三郷の北組、京町堀羽子板橋南詰め西入る」といえば、いまの西区靱二丁目、靱公園のテニスコートあたりだ。慶応三年（一八六七）九月中旬のある朝、ここにあった白米問屋・伊予屋孝右衛門、通称「伊予孝」の格子構えの店先きから、米つき男の調子のよいハナ歌が流れていた。向こうはち巻き、半裸姿の男数人が、それぞれからうすに向かい、足拍子をそろえて玄米をついていた。前年米屋をねらい打ちした世直し一揆がウソのような、平和な風景だった。

幕府は長州再征に連戦連敗し、世直し一揆で民衆の激しい抵抗を受けると、將軍家茂の死を機会にあわてて兵をおさめた。戦争がなくなると、暴騰していた米価も下がる。三郷の生活も常態に復した。そんななかで將軍職についた慶喜（よしのぶ）は、幕政に最後のカンフルを打ち続けた。嵐の前の静けさ、というところだが、それも一年とは続かなかった。

静寂を破ったのは、伊予孝の向かいにあった「こうべや栗本家」の番頭である。午前十時ごろ「お宅の屋根におフダがお着きや」と伊予孝へかけ込んできた。「なになに」と米つき男やでつちが表へ飛び出した。ハシゴを持ち出して小屋根にとまっていた「天照皇大神宮」の神符をおしただくと、奥へかけ込んで孝右衛門に知らせた。この種のおフダ「第一号」はそれより数日前、近くの瀬戸物問屋の大屋根にふついている。しかしふつってわいた出来事は最初は注目されない。「なんやしらんけどありがたいなあ」ぐらいのことで終わった。ところが「こんどはウチや。めでたい」というので、まず伊予孝の家内が大騒ぎとなった。

店の大戸をおろしてこの日は休業。土間をはき清めて神だなを設け、ヤレ灯明、ヤレお神酒（みき）とてんでこ舞いするうち、近所からお祝いの品々が届いた。午後になると騒ぎはもうひとつ大きくなつた。町内の人々がひぢりめんの長じゅばん姿で「エエじゃないか、エエじゃないか」と隊列を組んで土間におどり込んだ。こうなると放っておけない。四斗ダルをあけてふるまい酒は飲みほうだい、女中連はたき出しにかかる。飲めや歌え、踊れの乱痴気騒ぎが一日続いた。



(上) 長谷川小信筆の「お福  
ふり町方にぎわいの図」(下)  
穠村家にふった離縁状 (牧村史  
陽氏所蔵)

エエじゃない  
かは、大阪・京  
都・大津・西  
宮、つまり上方  
一円でとくに目  
立った。それ以  
外の地方では天  
保元年に続く  
「お蔭まいり」  
「お蔭おどり」  
を巻きおこし  
た。お福が天  
からふる、とい

など、わかったようなわからぬようなもの。十二月七日幕府は諸外国との約束で兵庫を開港、大阪を開市したが、大阪を訪れたイギリスの外交官アーネスト・サトウは「燃えたつような赤い着物をきてわめき、踊り狂う人の群れをかきわけて行くのに、相当な困難を感じた。われわれ一行はほとんど注目されず通りすぎた」と群衆の熱中ぶりを書きとめている。

大阪三郷はもちろん、周辺の村々はそれからが大変。お福がふりまくる騒ぎとなった。慶応三年発行の「神仏臨降末代栗(しおり)」によると、大阪三郷では十月の最高は一日二十二か所、十一月は同五十か所といった調子。ふったものはおもにお福だったが、なかには小さい仏像や一両小判なども記録されている。ところがここに、一軒でなんと二百十二枚を授かった「横綱」がいる。現在神戸市灘区礎和町二の四に住んでいる穠村(あきむら)はつさん(あき)の先祖、治郎兵衛家。元の家は南区鍛冶屋町六一にあり、二百年前、初代治郎兵衛さんがつくった和釘(くぎ)問屋はいまも「針金卸業・株式会社穠村商店」として連綿と続いている。こう枚数が多くなると、さすがにふらせるものがなくなったのか、「三下り半」の離縁状から、借金証文まであったが、はつさんは「人にさしあげたもの以外は全部戦災で焼きました」とおしむ。

お福がふるたびに伊予孝と同じ、いやそれ以上の群衆が踊り狂った。はやし文句も「エエじゃないか、破れたらまた張れエエじゃないか」「お前がタコならおれもタコ、互いに吸いつきやエエじゃないか」「ギャットセ、ギャットスリや夜明けの鐘太鼓、ドンと鳴りやつらいね、エエじゃないか」

竹(しようちく)。伊予孝のお孫さんが、いま西宮市今津野田町二八の二に住む郷土史家・篠崎昌美さん(あき)である。篠崎さんは子ども時分、祖母のことさんから「エエじゃないか」をなん度も聞かされたが、この話には続きがある。翌朝、庭にまた神符が舞い落ちていたのをみつけたことさんは、それをひろってこっそり祭壇に入れておいたという。使用人が知るとまた近所から踊り込まれ、四斗ダルがカラになるのを恐れたからだ。大阪町人らしい。



う非科学的なことはありうるはずがないから、倒幕派志士によって計画的におこされた、という説が有力だ。その当否はともかく、アーネスト・サトウなど異人さえ目に入らないほどの混乱が、倒幕派によって利用されたことは事実だろう。

將軍慶喜は十月十四日、大政を奉還してでも、なお徳川氏を列藩会議の議長の席にすえようとした。これに対する薩長の武力倒幕への画策は、すべて民衆が踊り狂っている間のできごとだったから。

## あとがき

「歩けよ」——社会部長にこの仕事をいわれたときの、たった一つの注文である。足で書くのは新聞記事の鉄則であり、連載ものもその例外ではないが、歴史もので「歩く」ことは、大きに言えば歴史の要求するすべてをふくんでいる。新しい事実の発見、史実の再検討、「人間不在」の解決、そして新聞の連載ものとしては欠かせない現代の目。なにはともあれ、わたくしたちも歩かなければ、と思った。四十一年はじめからマスコミはなん度目かの「百年ブーム」をむかえ、××百年式の企画がはらんしたが、既存史料のアレンジ、ひき写しに終わっているもの多いのを、あきたらなく思っていたからだ。

しかし、毎日掲載のなかで、歩ききれるか？連載第一回の大塩の乱の取材で、計屋晃成君ら八人の子孫をやっとみつけ出せたとき、わたくしたちは「こんなやり方も歴史に血を通わせる一つの方法では……」と考えた。この人たちの話には、史料には書いていない「なにが」があった。だから以後も、できるだけ子孫や目撃者に登場してもらおうようにつとめた。そのかたわら、日本の中央偏重のひどさをあらためて思い知らされた。史料のほとんどが東京一辺倒であり、英雄中心だった。一つには地方の努力不足にもよる。百年史の編さんを学者に依頼しているある役所の編集会議で「だれもが親しめるものに」という提案は、「そんなものは売文屋に書かせなさい」と一蹴されたという。これでは歴史はみんなのものにならない。

さて、わたくしたちの結果はご覧の通り。この巻には、昭和四十一年三月十四日から同五月二十九日までの六十回分に、一部加筆した。はじめの意図が十分果されたとは思われないが、一つの実験的役割は果していると自負している。取材にあたって次の先生方のご協力をいただいた。名前を明記して、感謝したい。(順不同、敬称略)

大阪府史編集資料室参与・加藤政一。大阪城天守閣主任・岡本良一。大阪大学教授・宮本又次。大阪府史編集室主幹・市村為国。同室・藤本篤。郷土史家・牧村史陽。同・出口伸。同・篠崎昌美。文楽協会資料室長・鷺谷樗風。大阪府立図書館閲覧課長・奥寿二。また連載四回目で「本にしたい」と持ち込まれた浪速社・矢野功さんにもお世話になった。

昭和四十一年九月

大阪読売新聞社・社会部

田 村 洋 三  
大 西 進  
岸 本 洋 平

百年の大阪

第一巻 幕末維新

昭和41年10月28日 第一刷

編者 大阪読売新聞社

発行者 矢野 功

大阪市東区豊後町二二

発行所 浪速(株)社

振替口座 大阪一九三〇四

電話(例)一六三九・八三二五

1966.

定価 450円

★検印廃止

・読者の皆さんへ・  
小社の書籍は全国の書店・百貨店で発売していますが、万一品切等のため店頭がない場合は「浪速社」発行と、ご明示のうえ、取寄せ注文をご依頼下さい。7日前後でお手もとに届きます。